

樂学校でジャズギターを教えています。また、水戸市やひたちなか市のライブハウスで演奏しています」

—では、音楽学校の話から聞かせて下さい。

「昨日も行ってきたのですが、月に一回程度、東京の幡ヶ谷にあるアン・ミュージックスクールでジャズギターを教えています。もう三十八年になりますから、スタッフを含めて最古参になりました。教え子の中から四名が先生として巣立ちました。教え方としては、ドラムとベースはプロの方にお願いし、生徒二十五人の一人ひとりのジャズギター演奏に対し、理論的なことも含めてアドバイスします。午後一時から七時半までかかりますから、なかなか体力的にきついですね」

—ジャズは、教わって覚えられるものなのですか。

—基本は耳ですが、耳でついていけない部分があるのです。理論を学ぶことで、自信を持つ音を出せるようになります。でも、教える側が自分の知っていることを言つただけでは、生徒は演奏で

できません。レベルが一人ひとり違うので、レベルを合わせて指導していく必要があるのです。

ジャズは、人間性や性格が表現されやすい音楽です。そういう点で、クラシックと違った難しさがあります」

—「ひたちなか市の『サムシング』という店で月に二回ライブ演奏しています。前は、毎週曜日にソロ演奏していたのですが、指が腱鞘炎になってしまい（笑）」

—「ひたちなか市の『ブルームース』でも演奏しています」

戦後の進駐軍相手に演奏

—お生まれと経歴を紹介下さい。

—昭和四年に東京港区の芝で生まれました。海に近い高台でした。子供のころは、戦争中の食糧難の時代で、中学は近くの明治学院に通いましたが、勤労動員で一年生のときは工場での旋盤作業や建物の取り壊し作業、二年生になつたら宮田製作所という自転車メーカーで航空機用の給油機やタイヤなどを製造しました。その後、母に頼んでクラシックギ

大空襲の次の日、会社へ出勤途中でたくさんの人が川で死んでいるのを見ました。悲惨でした。戦争が終わって中学四年に復帰したのですが、社会は文字通りの混乱期で、だれも勉強できませんから、試験もなしに進級するありました。学校は新制大学の明治学院大学に変わりました。

街には、米軍が闊歩していました。そのころハワイアンに興味を持ち、スチールギター同好会を結成し、自分はウクレレを担当しました。米軍キャンプには、いくつものクラブがあり、ちょっと演奏できれば仕事はいくらでもありました。我々の同好会はいくらでもありました。

—現在もライブ活動中

鈴木さんは、二階の窓から約束の時間よりも早く到着した我々に気づき、二階の自室に案内いただいた。ソファーの横には、愛用のギター（ギブソン）が置かれていた。

—さつそくですが近況を紹介下さい。

—「現在七十歳になりますが、東京の音

鈴木康允さんに聞く

日本ジャズ界の草分け 現在もライブステージに

編集部（日研）中島啓介・（電開研）下河邊伊久夫

第一の人生をいきいきと活躍される先輩にお話ををお伺いしている「第二の人生いきいきインタビュー」は三十四回目。今回は、渡辺貞夫、益智、フランキー堺等々日本ジャズ界の草分けとして活躍、「ボンちゃん」の愛称で親しまれたギタリスト鈴木康允さんにお願いした。ひたちなか市に移られても後継の指導、地元の音楽発展に貢献されている鈴木さんは、七十歳の現在もひたちなか市や水戸市でのライブステージで演奏され、手紙、電話で予約。平成十二年九月二日午後一時から自宅でインスピュートさせていただいた。この日は猛暑の中、茨城県防災訓練が近くで実施され、ヘリコプターが空を舞っていた。

—現在もライブステージに

<第二の人生いきいきインタビュー④>



ターを貰つてもらいました。戦前に米国から輸入したものだったと思います」

——プロへの道のりを紹介下さい。

「同好会四人で進駐軍を回っていたのですが、同好会ではレパートリー不足を感じていました。そこで慶應や早稲田の学生と組みアマチュアバンドを結成しました。テストを受けに横浜にも出かけました。そうすると、九州でプロバンドにならないかとスカウトがあり、大学を中退し、ジャズギタリストでした。三ヶ月間九州を巡業しました。十九歳でした」

新聞で「東京から一浪バンド来る」など紹介されました。月給は三万五千円でした。その後、桜井センリさんから手紙をいただきました。東京に帰ってきたら一緒にバンドをやらないかという内容でした。センリさんといえば、ピアノの名手として有名で、私も桜井さんとできたらと思つていたので、喜びました。二十歳のころでしょうか。

給料は下がりましたが、東京で初めてのナイトクラブ「コスモボリタン」の専属ギタリストとなりました。店は、いつもすごく混んでいて、米国のミュージカルへ来られた経緯は。

「ひたちなか市に妻の実家があるので妻は現在も美容室をやっているのですが、若いころ東京の美容院で働いていました。私の自宅が近かったので、そこに母や姉が通つていて、姉が私の演奏に誘つたのがきっかけです。

結婚して、東横線の都立大前のマンションに住んでいたのですが、子供ができると、東京は空気が悪いし、道路に歩道がなく危ないこんなところで子供を育てたくないと思い、那珂湊にある妻の実家の二階に引っ越しました」

——東京での音楽活動を止めるには決心が必要ででしょう。

「敬愛するジム・ホールに四回も演奏を聞いてもらつたのです。『これでやめても良い』と思いつました」

——ジム・ホールとの出会いは。

シャンも兵隊として来ており、その前で演奏することは勉強になりました。毎日午前三時とか四時ごろまでやつっていましたが、自分の好きな音楽をやることは満足でした」

——フランキー堺さんのバンドにも所属されたそうですね。

「ジョージ川口、小野満、レイモンド・コンテが所属し、日本で一番のバンドである『ゲーセブテッド』から引き抜きがあつたのですが、センリさんから『今はだめ』と断らせてもらいました」

しかし、そのセンリさん当人が自分でやめてしまい(笑)、残党を引き連れて自分がリーダーになりました。月給一万円程度でした。二十八歳のとき、フランキー堺さんのコンボ『シティースリック』に加わりました。フランキー堺さんのドラムはすごかつたですね。ドラムのスネアが破れ、ステイックが折れ、汗が飛び散る迫力でした。日劇で演奏できて、人気も出て、収入も多かつたのですが、一年半たつところ『めでたく、やめたくて』仕方がなくなり、途中で止めてしましました」

——なぜですか。

「コメディー調の音楽に嫌気がさしたのです。もともとはスパイク・ジョーンズがやり始めた音楽スタイルを真似たものですが、本家はジャズから、いつの間にか、くだけた音楽に変化する、洒落たものなのですが、日本でやると、それが『わんどん屋』になってしまふのです。僕は即興のアドリブで自分流の音楽を演奏したかったのです。自分はモダンな音楽をやらせられなくて申し訳ない」と言つてもらいました。「代わりの人を探しましょうか」と言つたら、後輩が、一人あてにしているギタリストがいる」とことで、それが植木等です。このスリッカーズは、植木等さんをギタリストとして迎え、後のクレージー・キャッツへと進んでいくわけです」

——ハナ肇さんは?

「ハナちゃんは、別んどこでドラム叩いてたんだけど、しょっちゅう遊びに来てね。冗談言つて皆を笑わせるのが好きだったね。『クレージー・キャッツ』が



ジャズギタリストの大御所ジム・ホールと

私は英語がまったくダメ、ジムも日本語が話せません。仕方ないので、英語ができるピアニストの所へ車で案内することにしました。その途中、ジムは、辞書片手に懸命に日本語で話をしてくれたのですが、それが「街並みがきれいですね」と意味であることを理解するまでにずいぶん苦労しました(笑い)」

(注)ジム・ホール:……ジョー・バス、バーニー・ケッセルとともに現代ジャズ・ギター界の最高峰に位置する巨匠

